HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ブーニン作品の東方的要素ー中編小説『兄弟たち』を中心にー
Author(s)	望月, 恒子
Citation	辺境と異境 : 非中心におけるロシア文化の比較研究　(基盤研究 (B)研究成果報告書), (1), 1-9
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51995
Type	report
File Information	2010.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ブーニン作品の東方的要素
—中編小説『兄弟たち』を中心に—

望月恒子

0. はじめに

ブーニンは仏教、イスラム教、インド哲学などの東方思想に深い関心をもち、それらに関する書物を愛読していた。また、中東やセイロンに旅をして、その経験に基づいた作品も書いているので、ブーニン研究においては、作家と東方との関わりがしばしば取り上げられる。個々の作品のみならず、ブーニンの創作全体にとって、東方は大きな意味を持つと考えられる。本稿では、ブーニンの東方への旅行や、東方と関係する作品を概観し、その中で特に中編小説『兄弟たち Братья』(1914) を取り上げ、東方的要素が作品でどのような意味を持っているかを探ってみたい。

1. 東方への旅 と旅日記

ブーニンは生来、旅を愛した。1920 年に 50 歳で亡命するが、それまでの約 30 年間、19 歳でエレーツ近郊の生家を出てからのロシアでの生活では、定住の家を持たず、国内・国外を頻繁に旅行した。中でも第一次革命後の 1907 年から第一次世界大戦勃発の 1914 年までが、よく旅をした期間である。1907 年のギリシア、エジプト、シリア、パレスチナへの旅、そして 1911 年のセイロンへの旅からは、非常に大きな印象を得た。

1907 年の中東旅行をもとに、連作『鳥の影 Тень птицы』(1907－1911) が生まれた。これは、旅日記をもとにしたものであり、「神々の海 Море богов」「デルタ Дельта」「ソドムの国 Страна содомская」「太陽の神殿 Храм солнца」など 11 編から構成されている。ブーニンは日記という形式を独特な文学ジャンルとして意識していた。「日記はもっともすばらしい文学形式のひとつである。遠からぬ将来に、この形式は他のすべてを排除すると思う」と語ったこともある。[1] 連作『鳥の影』には日付は記されていないが、「ひっそりとした黒海に出て二日目だ」(3,499)[2]という一文に始まり、コンスタンチノープル、アテネ、アレクサンドリア、カイロ、エルサレム、ベイルートという旅程に従って、一人称で記された 11 編の詩的散文が並べられている。亡命後の 1932 年にブーニンは、「私は、世界のす

---

1 *Бунин И. А.* Собрание сочинений в 6 тт. Т.3, М., 1987. С.655.

2 *Бунин И. А.* Собрание сочинений в 6 тт. М., 1987-88. ブーニンの作品の引用はこの版により、( ) 内に巻数とページ数を記す。

べてのネクロポリス、墓地に魅せられてきた」と語った。[3]確かに彼は、ヨーロッパ以外の「東洋」、もしくは、古代エジプトやメソポタミアをも包含して広く「オリエント」と呼ばれる地域へ旅行するとき、現在栄えている場所よりも、はるか昔に栄えた場所、現在では廃墟となっている場所を、好んで訪れた。したがって連作『鳥の影』でも、古代の遺跡や墓所、そして廃墟の描写が続いている。

船上からアクロポリスのパルテノン神殿を見たときの描写は、以下の通りである。

> ――アクロポリスはどんなふうだ？　すべての双眼鏡がそれを探し、ギリシア人たちは船尾の甲板から激しい勢いで遠くを指差した。そしてついに私は見つけた。谷間に連なる屋根の向こうに石の丘がぽつんと立ち、その上におぼろに黄色いものがある。小さな、荒れた要塞のようなものだ。草木のない、ペラスゴイ人たちの丘を目にしたとき、私は生まれて初めて、存在全体で*古代*を感じ取った。（3,519　イタリックはブーニンによる）

エジプトでピラミッドを見たときには、次のように書いた。

> ――この中には今や何もない。暗闇と、コウモリと、覆いのない巨大な玄室があるばかりだ･･･。6000 年間も大地を驚かせてきた人物の遺骨は、今どこにあるのだろう。<中略>だが、それはどうでもよいではないか。こうして私はここに立ち、人間が削った石のうちで、ひょっとしたら最古のものに手で触れている！　今朝と同じような酷暑の朝にこれらの石が置かれてから、大地は千回も顔を変えてきた。その朝から 20 世紀が経過してやっとモーゼが生まれた。40 世紀が経過して、ティベリアス湖のほとりにイエスがやって来た･･･。しかし、数世紀が、数千年が過ぎ、こうして私の手が、これらの石を置いたアラブ人捕虜の灰青色の手と、兄弟のように合わせられる･･･。（3,535）

ベツレヘムでソロモンの池を訪れたときは、次のような感慨を書きとめている。

> ――生は巨大な円を描いて閉じた。この地に幾つもの大帝国を築き、それらを破壊し、滅亡させて、原初の貧困と単純へと立ち返った。
>
> Жизнь совершила огромный круг, создала на этой земле великие царства и, разрушив, истребив их, вернулась к первобытной нищете и простоте ...（3,545）

「世界のすべてのネクロポリス、墓地」に魅せられたブーニンの旅は、空間の旅であると同時に時間の旅であり、彼は旅先の廃墟や遺跡において、数千年前の人間たちの生の跡をまざまざと感じ取ることができた。

ブーニンは 1911 年にセイロンへ向かう際にも日記をつけ、それは後に『たくさんの海

3　*Кузнецова Г.* Грасский дневник. М., 2001. С.325.

Воды многие』（1925）という題で発表された。『鳥の影』と異なり、この作品には日付が残され、日記の体裁を保っている。日付は 1911 年 2 月 12 日にはじまり、その日付に続いて「深夜、ポートサイド」と添え書きがある。翌日が「2 月 13 日、スエズ運河」、さらに「2 月 14 日、紅海」と続くが、2 月 15 日以降の日付には場所の説明が見られなくなる。船が大洋に出たのだ。最後の節は「3 月 1 日、深夜」とはじまり、「大洋での最後の夜、明日はセイロン、コロンボだ」(4,470)という文がある。つまり、『たくさんの海』は、ポートサイドを出航してから目的地コロンボに着くまで、約 20 日間の船旅の日記である。スエズ運河から紅海を経てインド洋を航海していくのだから、見えるものは海と空だけという環境の中で、作家は人生や世界について深遠で抽象的な思念を繰り広げ、それを書き記す。

——私の生は、永遠なるものと束の間のものへの関与、近しいものと遠いものへの、あらゆる時代と国々への、私がこんなに愛しているこの世界に過去に存在した、現在存在しているすべてものの生命への、戦慄と歓喜に満ちた関与である。神よ、我に与えられた時を延ばしたまえ！

Жизнь моя – трепетное и радостное причастие вечному и временному, близкому и далекому, всем векам и странам, жизни всего бывшего и сущего на этой земле, столь любимой мною. Продли, боже, сроки мои!（4,450）

——世界はどこまでも空っぽだった。周りに生きた存在は一つもなく、ぽつんぽつんと番人の土小屋があるほかは家ひとつなかった。この灰黄色の世界で、四方八方から黄色い砂山に押されて、それらの土小屋も孤独だった。しかし、全人類の魂、数千年の魂は、私とともに、私の中にあるという気がした。　（下線部のみ原文を付す）

Но, казалось, душа всего человечества, душа тысячелетий была со мной и во мне.（4,452）

人類の歴史について、過去について、根本的に思いをめぐらす中で、「汝の父と母を敬え」という、単純この上ないと思われる戒めについて、ブーニンは次のような解釈をくだす。

——唯一の生命が、我々の肉体を通して、神秘的放浪の旅をしている。その唯一無二を感じ取り、敬虔の念を抱け。ここに、お前の不死（日々の長さ）と、自己確立がある。

--единая жизнь совершает свое таинственное странствование через тела наши, -- стремись же ощущать это единство и благоговей: в нем твое бессмертие (долгота дней) и самоутверждение.（4,453）

半月間の旅日記をもとにした『たくさんの海』は、上に引用したように、その全体が抽象的・哲学的思考で覆われ、人類全体の過去に関する思索や、唯一無二の「命」が無数の肉体を遍歴して受け継がれていくという生命観などが記されている。これは、エジプトや

インド・セイロンという、どちらも人類最古の文明発祥の地であるトポスがもたらした思考であると言えよう。数週間を過ごしてきたエジプトについて、そしてこれから向かうセイロンについて思いをめぐらすとき、その思いは、人類全体の歴史や文明に関する思考につながり、それがさらに、それらの文明の基底にある生命観や不死に関する思考へとつながる。ブーニンがオリエントに旅したのは、そこが人類の歴史の黎明期と結びついた土地であり、その遺跡や廃墟を訪れることによって、個々の命が伝え続けてきた単一の「生」を全存在で感じ取ることができるからであった。

ブーニンは古代文明の遺跡の中で、古代に生きた他者の痕跡に触れたとき、その痕跡が残された瞬間を実感し、それによって自分の生の時間が拡張されるという感覚を持った。エジプト旅行を素材に作られた次の詩が、そのことを示している。

『岩場の墓所にて Могила в скале』(1909)

То было в полдень, в Нубии, на Ниле,
Пробили вход, затеплили огни —
И на полу преддверия, в тени,
На голубом и тонком слое пыли,
Нашли живой и четкий след ступни.

Я, путник, видел это. Я в могиле
Дышал теплом сухих камней. Они
Сокрытое пять тысяч лет хранили.
Был некий день, был некий краткий час,
Прощальный миг, когда в последний раз
Вздохнул здесь тот, кто узкою стопою
В атласный прах вдавил свой узкий след.

Тот миг воскрес. И на пять тысяч лет
Умножил жизнь, мне данную судьбою. (1,244)

それは真昼のことだった、ナイルのほとり、ヌビアの地で
入り口が穿たれ、燈がともされた
すると、扉の前の床の上、影になった所に
青く薄く埃が積もった中に
くっきりした足跡がひとつ見つかった

旅人の私はそれを見た。私は墓の中で
乾いた石の暖気を吸い込んだ。この石たちが
秘されたものを五千年間保存してきたのだ
ある日、ある短い時、
別れの瞬間があった。これが最後と
ここで吐息をついたのだ、つややかな埃の上に
幅の狭い足跡を残した、あの人物が

あの瞬間がよみがえった。そして五千年という長さを
運命によって私に与えられた生に、つけ加えたのだ

ブーニンは生に対して独特の感覚を持っていた。生は、自分に与えられた一回きりの個別のもののように思えるが、実は自分の感覚や記憶の中に、原初の人間から自分に至るまでの生の連鎖の中で経験したことが残っている。だから、人には、誕生と死で区切られる時間の中で経験することよりも、もっと多くのものが与えられている。また、ある種の人々は、自分に与えられた時間や空間、種族などの限界を超えて、他者の生をじかに関知する能力を持っていると、ブーニンは信じていた。このような考え方は、哲学的瞑想を綴った作品『夜 Ночь』(1925) に凝縮した形で表現されているが、他の作品にもそのような考え方や感覚の表れを見ることができる。上記の詩『岩場の墓所にて』にも、それが単純かつ明瞭な形で表されている。エジプトの地、ナイルのほとりで古代の墳墓を訪れて、床に積もった埃の上に一つの足跡が残っているのを目にする。そのとき、五千年前に生きた人物が足跡を残した瞬間をまざまざと追体験することによって、「私」の生に五千年という時間がつけ加えられる。ブーニンがオリエントの遺跡を好んで訪れたのは、まさにこうした感覚を味わうためであり、実際にそれをしばしば深く経験したのであった。

2.『兄弟』

東方への旅、特に 1911 年のセイロン旅行からは、旅日記をもとにした一人称の随想のほかに、いくつかの作品が生まれた。セイロンを舞台とする作品に、『兄弟 Братья』(1914)、『ゴータミ Готами』(1920)、『三等車 Третий класс』(1921) 、『否定の夜 Ночь отречения』(1925)がある。これらの中で『兄弟』だけが、登場人物や筋書きなど小説としての骨組みを備えており、他はエピソードや伝説をもとにした、2、3 ページのごく短い作品である。セイロン旅行が生み出した直接的な最大の成果が、『兄弟』であった。

『兄弟たち』は刊本で 20 ページほどの短編小説である。章には分けられていないが、冒

頭から3分の2ほどが、コロンボの人力車夫を主人公とする物語、残りの3分の1がコロンボからスエズへ向かう船に乗ったイギリス人紳士が船員たちと語る話である。前半の物語では、人力車夫の若者が、ある日イギリス人紳士を乗せて、コロンボの町を一日中走り回る。車夫はその日の夜に自殺を遂げるので、彼が人力車に乗せた最後の客が、後半で船に乗るイギリス人紳士ということになる。しかし、車夫と客の間に会話はなく、客が自分の雇った車夫の急死を知ったかどうかも書かれていないので、作品の前半と後半には筋書きの上では直接のつながりはない。車夫の死の10日ほど後に、出港間際のロシア船に艀で乗りつけたイギリス人は、彼の受け入れを渋る船長に、「あと2日コロンボで過ごすのは、私には非常に辛い。この気候に参ってしまって、具合が悪いんです」と必死で訴える。セイロンの気候、暑さ、不眠、それに痩せこけた現地の人が人力車に白人を乗せて、驚くほど細い足で走り回っている植民地の日常―こうしたものすべてが、つまりセイロンという土地の雰囲気こそが、作品の前半と後半をつなげている要素であると言えよう。

『兄弟たち』の冒頭に、次のエピグラフが置かれている。

> 殴り殺しあう兄弟を見よ。
> 私は悲しみについて語りたい。
>
> *スッタ・ニパータ*
>
> Взгляни на братьев, избивающих друг друга.
> Я хочу говорить о печали.
>
> *Сутта Нипата*

ブーニンが愛読したのは、パーリ語からのファウスベル訳をゲラシモフが英語からロシア語に訳した『スッタ・ニパータ』[4]であった。このゲラシモフ訳では、該当の箇所は以下のようになっている。

> Кто в руки взял жезл, тот нагоняет страх. Взгляни на людей, избивающих друг друга; я хочу говорить о печали, как я изведал ее.[5]

ロシア語を直訳するならば、「棒を手にした者は、恐怖心を起こさせる。殴り殺しあう者たちを見よ。私は自分が経験した悲しみについて語りたい」(下線は望月による)となろう。中村元の日本語訳では、「殺そうと争闘する人々を見よ。武器を執って打とうとしたことか

---

4 Сутта-Нипата. Сборник бесед и поучений. Буддийская каноническая книга, переведенная с языка пали на англ. язык д-ром Фаусбеллем. Русский перевод и предисловие Н.И.Герасимова. М., 1899.

5 http://www.dhamma.ru/canon/sut_nip.htm#_Toc484786557

ら恐怖が生じたのである。わたくしがぞっとしてそれを厭い離れたその衝撃を宣べよう」[6]となっている箇所である。すなわちブーニンは、故意にか、それとも記憶違いによるものか、「殴り殺しあう者たち（人々）」となっている箇所を、「殴り殺しあう兄弟」と言い換え、言い換えた部分の「兄弟」を作品のタイトルにした。武器を執って殺し合う人間たちは、実はもともと血を同じくする兄弟であるという意識の表れとも解釈できる。

T.K.ロバノヴァは、ブーニンと東方の関係を論じた論文で、「ブーニンは〈人々〉という語を〈兄弟〉と置き換えることによって、〈白い兄弟〉が〈黒い兄弟〉を破滅させることが語られている短編の社会的傾向をいっそう尖鋭にした」[7]と述べている。確かに、ブーニンはセイロンでヨーロッパ人による植民地支配の現状を見て、強い衝撃を受けた。作品『三等車』では、コロンボの鉄道の駅で、白人であるブーニンに対して駅員がどうしても三等車の切符を売ろうとしなかったこと、しつこく粘って切符は何とか手に入れたものの、車両の外壁にチョークで「満員」と書かれたため、現地の人々は入ってこなかったというエピソードが書かれている。『兄弟』では、主人公の若い人力車夫は、行方不明になっていた13歳の許嫁が、ヨーロッパ人の館に囲われているのを発見して、その日のうちに自殺する。この筋書きは、セイロンのロシア領事がシンハラ人の娘を愛人にしているという、作家が現地で聞いた話をもとにしたと、作家自身が明かしている。[8]作品では、明るく照らされた洋館の2階の窓辺に佇む少女の姿は、下の暗闇でショックに立ちすくむ車夫の目を通して、「赤い絹の日本のガウンをきて、三重になったルビーのネックレスをかけ、むき出しの腕に幅広い金のブレスレットをして」と描写される。半年前に若い車夫と婚約を取り交わした娘は、ある日買い物に出かけたまま失踪した。探しに出かけた娘の父親が、その後は落ち着いて何も言わなくなった様子から、娘は父親も納得ずくで西洋人の愛人にされたことがわかる。赤い絹のキモノに派手なアクセサリーというコケティッシュな装いをさせられた13歳の娘の姿と、裸同然の格好で棒のように細い手足で人力車を引き、キンマを噛んでは赤い唾液を吐く車夫の姿、そして白いスーツを着て人力車に乗って移動するヨーロッパ人たちの姿を対比すると、作品『三等車』同様に、植民地の状況へのブーニンの憤りが伝わってくる。「私はコロンボで、イギリス人たちがいつも、こわごわと注意しながら通りを歩くのを見て、我が目を信じられなかった。彼らは、タミル人やシンハラ人、あらゆる『有色人』、彼らのお気に入りの言葉によれば、〈唾棄すべき〉野蛮人に、うっかり接触して、

6　中村元訳『ブッダのことば』、岩波文庫、1984年、203頁（第四　八つの詩句の章　十五、武器を執ること　935）

7　*Лобанова Т. К.* Ориентальная проза И. Бунина и духовное наследие народов Востока. «Русская литература и Восток», Ташкент, 1988. С.75

8　*Лобанова Т. К.* Ориентальная проза И. Бунина и духовное наследие народов Востока. С.75

自分を汚すことが怖いのだ」と、作家は述懐している（4,665）。

しかし、『兄弟』全編から読み取れるのは、「白い兄弟」が「黒い兄弟」を滅ぼしているセイロンの現状への怒りというよりも、スッタ・ニパータからとられたエピグラフが示しているように、古代からずっと何らかの形で、兄弟たちが互いに殺し合うことを続けてきた人間存在そのものへの悲しみである。それは、自らは語る言葉を持たない若い車夫への地の文での語りかけも、また作品末尾でイギリス人が語る言葉も、人類の歴史や生命そのものに関する根本的な問いかけであり、抽象的な思念であることから、そう思われるのである。

たとえば、窓辺に佇んでいた娘が姿を隠したとき、それまで茫然と見つめていた車夫は、瞬時に、自分がどこへ何をしに行くべきかを理解して、まっしぐらに駆け出す。ある老人のもとへ走って、毒蛇を買い、その蛇に自分を噛ませるという、非常にエキゾチックな方法で自殺するのだ。いきなり走り出した車夫に関する叙述は、以下のようである。

> ―目覚めよ、目覚めよ！―この楽園の地で百回も朽ち果ててきた、彼の悲しい祖先たちの、数千の声なき声が、彼の中で響き渡った。―マーラ[9]の誘惑を、この短い人生の夢を、振るい落とせ！ 毒にやられ、矢に貫かれたおまえは、眠るべきか？ 百倍も愛しいものを持つ者は、百倍の苦しみを嘗める。すべての悲しみ、すべての不平は、愛から、心の愛着から生ずる。それらの愛着を殺してしまえ！ おまえが短い期間を静かな安らぎのうちに過ごしたのち、再び、そしてまた再び、千回も化身する間に、欲求を知った原初の人間たちの隠れ家であるおまえのエデンの園は、おまえを追放するだろう。しかし、それは、その短い休息は、おまえに訪れるだろう―あまりに早く人生の道に走り出て、夢中で幸福を追い求め、もっとも鋭い矢に傷つけられたおまえに。その鋭い矢とは、愛を渇望する心だ。<u>はるか昔から、勝者が強力な踵で敗者の喉を踏みつけてきた</u>、この古代世界に、繰り返し懐胎されることを望む、その心だ。（4,19－20）（下線は望月による）

愛着から悲しみが生じるのだから、愛着を断てという呼びかけや、千回の化身、繰り返しの懐胎といった言葉には、煩悩や輪廻などの仏教的観念の強い影響が見て取れる。この文脈において、「はるか昔から、勝者が強力な踵で敗者の喉を踏みつけてきた」という表現を読むと、作家がセイロンで目の当たりにした植民地支配の現実も当然含めて、常に勝者と敗者が存在した人類の歴史や、それを繰り返してきた人間存在そのものへの関心がうかがえる。『兄弟』の登場人物は、誰ひとり固有名詞を持たず、車夫、父、息子、許嫁、イギ

9 「修行中の釈尊を誘惑し、その成道を妨げようとした魔王の名」、『岩波仏教辞典』第二版、岩波書店、1989 年、958 頁

リス人、船長などの普通名詞で呼ばれ、さらに区別が必要な時にも、「父のほうの車夫」「息子のほうの車夫」等と呼ばれる。このことも作品の象徴性を高め、個々の人間についてではなく、人間存在そのものについて考えさせる作用をする。

ブーニンにとって、東方とはそのような思考をうながす場所であった。作品『兄弟』の最後で、その種の抽象的議論をくりひろげたイギリス人は、ロシア人の船長に「それは、セイロンの影響ですね」と言われて、「まさにその通りです」と答える。「ただこの地でだけ、最古の人類の土地、我々が失ったエデンの園、我々が植民地と呼んで、ひどく収奪しているこの地で、汚れ、ペスト、コレラ、熱病、我々によって家畜にされた有色人種に囲まれて、我々はただここでだけ、生命、死、神というものをある程度感じるのです」（4,25）と言っている。このイギリス人の言葉は、東方というトポスに対する作家自身の感懐と受けとっていいだろう。